

「エコシティたかつ」 推進フォーラム
～みんなで作ろう「エコシティの輪」！～ 開催結果

- 日 時：平成 25 年 12 月 8 日（日）13：30～16：30
- 場 所：高津区役所 1 階市民ホール
 市民ホールにて「エコシティたかつ」や区内養護学校・小学校・保育園で
 ピオトープを活用した授業等の成果物を展示
 保健ホールにてたちばな野菜の味噌汁を無料提供

■主 催：「エコシティたかつ」推進会議、川崎市高津区役所

■来場者数：約 100 名

■プログラム

【第一部】学校ピオトープ交流会

児童・生徒による区内の小学校にあるピオトープを活用した学習の発表

- ・発表校
 梶ヶ谷小学校（3 年生（6 名））
 市立養護学校（荒井教頭先生）
 下作延小学校（3 年生（16 名））
 小学館アカデミーむさししんじょう第 2 保育園（武川氏・松田園長）
- ・講 評
 岸 由二委員長（「エコシティたかつ」推進会議委員長・慶応義塾大学名誉教授）

【第二部】パネルディスカッション

これからの時代にふさわしい「エコ・コミュニティ」づくりとは

- ・ファシリテーター
 田中 友章氏（「エコシティたかつ」推進会議 委員、明治大学理工学部教授）
- ・パネリスト
 笹子 まさえ氏（「エコシティたかつ」推進会議 委員、
 川崎市地球温暖化防止活動推進センター）
 横山 滋氏（「エコシティたかつ」推進会議 副委員長、区民）
 酒井 富雄氏（「エコシティたかつ」推進会議 委員、
 NEC インフロンティア株式会社）
 仲村 美津子氏（たちばな農のあるまちづくり推進会議）
 宮川 潔（高津区役所まちづくり推進部企画課）

■推進フォーラム概要

1【第一部】学校ビオトープ交流会

(1)各学校からの発表

①梶ヶ谷小学校の発表

3年生（6名）からビオトープ学習に関する発表がありました。

【発表】

これから梶ヶ谷小学校の発表を始めます。私たちは3年生になって3回ビオトープ学習をしました。

春の学習で学んだことを発表します。理科室に入ってなにが始まるのかドキドキしました。オタマジャクシやイトミミズなどビオトープにいる生き物を見つけました。ヤゴの種類もたくさんありました。よく見るとトゲの生えているヤゴもいました。見つけた生き物は観察カードに書きました。イトミミズはくねくねしていました。トンボの幼虫がヤゴだということがわかりました。私が観察したタニシはあまり動きませんでした。春の学習ではビオトープに色々な生き物がいることがわかりました。夏の学習ではどのような生き物がいるか考えたりもしました。

続いて、夏の学習で学んだことを発表します。虫眼鏡やスポイトを使って調べました。何が捕れるかはドキドキしていました。春にはいなかった生き物もいました。夏には春よりたくさんの生き物がいることがわかりました。サカマキガイを見つけて、貝の巻き方が逆だと気づきました。ヤゴが春より大きくなっていました。秋にはもっと成長していて欲しいと思いました。秋こそは外で捕りたいと思いました。夏の学習では春にいた生き物が大きくなっていることがわかりました。

続いて、秋の学習で学んだことを発表します。初めて外で生き物を集めました。見つけるのが大変でした。ヤゴには色々な種類がいることがわかりました。トンボには色々な種類がいることがわかり、それぞれ特徴があることもわかりました。ミズムシは池に落ちた落ち葉などを食べ、池をキレイにしていることを初めて知りました。生き物は私たち人間と同じくらい大切だと思いました。探したらたくさん生き物がいました。ヤゴも詳しく観察カードにまとめました。自分でみつけた生き物を観察できて良かったです。

冬の学習でも自分で見つけた生き物を観察したいです。秋の学習では生き物が助け合って生きていることがわかりました。冬の学習が楽しみです。これで発表を終わります。ありがとうございました。

【会場からの感想】

- ・梶ヶ谷小学校の3年生はオタマジャクシなどのことを調べていましたが、私たちは池のビオトープの中にいるホトケドジョウやメダカのことを学習し、冬など、この前にやった理科のビオトープのことではメダカなど小さな生き物はあまり動かなかったのですが、ホトケドジョウは冷たい水が大好きでたくさん元気に動いていました。梶ヶ谷小学校はたくさんの魚のことを調べていたので、私たちもたくさん魚のことを調べているので、発表も聞いてもらいたいです。（下作延小学校3年生）



- ・梶ヶ谷小学校のビオトープでは下作延小学校のビオトープと違ってオタマジャクシや色々なものがいました。でも、下作延小学校はホトケドジョウやメダカがいて、梶ヶ谷小学校のビオトープとは少し環境が違うと思いました。(下作延小学校3年生)
- ・おつかれさまでした。僕は、サカマキガイは初めて聞いた名前です。全然知らなかった。そういうところを春、夏、秋、冬ときちんと見てらっしゃるんだなと思った。そして季節を追って生物の成長、棲んでいる違いなど、そういったものをきちんと続けて見てらっしゃるのがすごく素晴らしいと感じました。これからもビオトープを大事にして引き続き観察をしてください。どうもおつかれさまでした。(秋岡高津区長)

②市立養護学校の発表

荒井教頭先生から中学部3年生のビオトープの授業やエコに関する取組みについて発表がありました。

【発表】

ここにいらっしゃる皆さんの中で、もしかしたら「養護学校ってどこにあるのかな」と思っている方がいらしたり、あるいは「ああ、しばられ松のところでしょ」と思ったりしている方がいらっしゃるかもしれません。実は高津区には養護学校が2つあります。1つは私どもが子どもたちと一緒に勉強している川崎市立養護学校という学校で、それは久本小学校や高津中学校の近く、高津区久本にあります。もう1つのしばられ松のところにあるのは、県立高津養護学校と違って別の学校なんですけど、けっこう川崎市民の皆さんでも川崎市立高津養護学校と言われることがあります。それから郵便も間違っただけで届くこともあります。私たちは川崎市立のなんにも付かない養護学校というのが正式な名前です。



私どもの養護学校も今年の夏にご縁があってビオトープを作って頂くことになりました。高津区の小学校で順番に整備されてきたビオトープの最後の方に私どもの方にも話しがあって、とても私たちは嬉しかったです。その時に、多摩川から順番に各小学校とかを經由してだんだん奥の方まで生き物が入っていくんですと伺って、養護学校もそのお役にたてるかなと思うと、校長はじめわくわくしながら待っていました。

ここに写っているのが私たちのささやかなビオトープですが、元々遊具のある所の一角の砂場だった場所です。ただ、砂場というのはなかなか管理が難しかったり、放っておくと固くなったりしてしまっていて、養護学校の子どもたちも、それから遊びに来てくれる近隣のお子さん達にも、あまり楽しんでもらえる場所ではなかったのが、ここに生まれ変わってもらったことに致しました。大きさは元々このままの扇型の形だったんですが、そこに夏休みに工事をして頂き、真ん中の所、四角く凹んでいる所はビオトープにするために掘り下げて頂いて、ビオトープの為の準備をしました。夏休み中に工事が行われて、先ほどご挨拶をしておいででした秋岡区長様にもおいで頂いて、10月4日(木)にいよいよビオトープへの放流式を行いました。(写真を指さして)今、お話ししているのが高津区長様です。この放流式には養護学校の生徒、中学部の生徒全員が参加したのですが、その前の時間に

NPOからおいでになった先生に中学部3年生が授業をして頂きました。4時間目に授業をしてビオトープってなんなのかな?ってことと、ビオトープができたらどういうことが楽しいのかなというお話を聞いていたのですが、それを受けて給食の後に放流式を行いました。まず最初は中学部3年生の生徒が水のなかに植物を植える活動から入りました。みんな長靴をはいて植物を植えようとしているところです。この時には、大きな大人用の長靴をはいてしずしずと入っていた人もいれば、大胆にジャブジャブと入った人もいて個性が現れましたが、この日は10月の始めのわりには寒い日だったのですが、3年生が頑張って蔦を植えました。鉢ごと水の深い所に植えたり、水の浅いところに置いたりしました。次にいよいよ、メダカを放流しますということで、これは中学部の生徒の他に隣のNECの住宅にお住まいのほんとに小さなお友達も来て一緒に放流してくれました。小さなお友達に手を貸してくださっているのが秋岡区長様ですね。この時に放流したメダカは25匹だったのですが、その前のお話で隣の久本小学校は30匹放流したメダカが翌年には何匹になったかというお話を聞いていたので、私たちもとても楽しみにしています。さて皆さん、久本小学校の30匹のメダカ、翌年何匹になったでしょう。聞きましたか。30匹が何匹になったと思いますか。どれくらいになったと思いますか。(会場より回答)120匹、4倍ですね。大人の方がいかがでしょう?(会場より回答)500匹。まだまだ。私が聞いた話しだと30匹のメダカが760匹に増えていたそうです。それを聞いて、ただ久本小学校のペンギン池はご承知のとおり大きなお池なので、私たちはそこまでは欲張りませんが、でもさっき言ってくれたように25匹が120匹ぐらいになるといいなとひそかに思っています。この放流したメダカをじっと心配そうに見つめていた生徒達です。

ただ、この放流式の直後に大雨が降りまして、10月は雨が大変多くって、そして排水溝のところに落ち葉がかぶさってしまった関係で、オーバーフロー、洪水になってしまったんです。水が溢れてしまいました。大雨の翌日心配して学校に来た用務員さんが池の周りにびちびち跳ねているメダカを見つけて、大変私たちは心配をしました。25匹みんないなくなっちゃったんじゃないかという心配もしたんです。その後もだんだん動きがおそくなったことありメダカが見つからなくなって心配したのですが、その後無事に生きていることが確認されました。

ではちょっと養護学校ならではもう1つのエコの話を見せて頂きたいと思います。さて、この得体のしれない物はなんでしょうか。高等部の学習の中で行われている活動なんです。これはちょっと見た感じ触りたくないよね。うなずいている方もいます。でもね、これ実はとても役にたつものなんです。順番からいくと下から上がって行って頂くと経過がわかるかと思うのですが、ここにあるこれはそう皆さんも給食で毎日お野菜食べていると思うんですけど、給食で出た野菜のはじっこです。残飯というところとちょっと違うかもしれませんね。まだ、みんなが食べ残した物ではなく、野菜の皮とかそういうところです。これはサツマイモだと思うのですが皮を細かく、細かく生徒が刻んでいきます。そしてこの容器の中に入れて、さらにEMぼかし菌という微生物を発酵させる菌を入れて3週間程、夏だともう少し早かったり、冬だともう少しかかったりしますが、熟成させます。そうするとここにある園芸用の土ができて上がるということです。完成見本品を持って参りました。もちろん野菜くずだけでは土にはなりません。赤土とか土を混ぜてこういう物が完成するのですが、これは私どもの作業学習ででき上がったもので、なんと1袋100円。高いか安いかは意見が分かれるところですが、これで作物を育てると花がとても色が鮮やかになります。それから、私もピーマン作ったことがあります。野菜がとても甘くなります。完全無農薬有機肥料ということになるのでしょうか。厳密に言うと肥料ではなく土です。こ

の活動は私どもの養護学校の高等部では10年以上の歴史があり、かれこれ15年になるでしょう。土をつくり、その土はこうして学校内の花壇の花々を育てるのに役に立ったり、また園芸班では土だけではなく野菜もつくったりしていますので、園芸班で育てる野菜用の土にまたなります。捨ててしまえばゴミになるものですが私たちの生徒の活動はゴミにはせず、また新たな作物を育てたり花々を育てる役に立つ、そういった活動をしています。それからちゃんとお金を頂いて売り上げも少しずつですが上げています。

この下の写真ですけれども、道路を挟んだお向かいの会社に大変お世話になっているので、恩返しの意味を込めて会社の前にあるプランターに先日お花を植えました。お母さんとかボランティアの方もお手伝いして頂いてキレイな花を咲かせています。ビオトープの話から後半外れてしまいましたが、私共の学校でやっているこの活動もエコシティたかつの活動とはぴったりリンクしているかなと思ったのでご紹介させて頂きました。ご静聴どうもありがとうございました。

【会場からの感想（抜粋）】

- ・まず砂場が、今まであんなに使っていなかった砂場がとても素敵なビオトープに変身してすごいなと思いました。その活動の中に、生徒さんだけではなくご近所の小さい方もみんなで参加して、みんなで関わって作っていたところが非常に素敵だなと思いました。また、その後の土作りに関しては、野菜くずを使った土でお花がキレイな色になったり、野菜が甘くなったりするというのを伺って、本当に野菜にとってもお花にとっても、とてもいいところなんだなとわかりましたので、是非来年も参考にさせて頂きたいなと思いました。ありがとうございました。（小学館アカデミーむさししんじょう第2保育園）
- ・私は高津区市民健康の森を育てる会で活動している山田と申します。先ほど荒井教頭先生からお話でしたが、10月4日（金）に行われましたビオトープの放流式に参加させて頂きました。中等部の72名の生徒さんが順序良く交代でメダカを放流されておられました。皆さんなんとも生き生きとして元気がありますが、私へもひしひしと伝わってまいりました。当日、ご指導頂きました方が言っておられました。先ほど荒井教頭先生がおっしゃったとおり、放流したメダカが来年になると増えるということをおられたのですが、その時にスイレンとアカザとクワイを植えられたんですね。これらは来年は立派に育つと期待しているところでございます。ところで養護学校の生徒の皆さんへ、私の方からお願いがございます。皆さんが味わわれたビオトープの活動でございますけれども、活動が疎かになりますと、ビオトープは無駄になりかねないと聞いておりますので、休まずこれからも是非活動して下さい。今日は素晴らしい発表をありがとうございました。（「エコシティたかつ」推進会議・山田委員）



②下作延小学校（3年生）の発表

3年生（16名）からビオトープ学習に関する発表（生徒役、生物役に分かれた演劇形式による発表）がありました。

【発表】

僕たち下作延小学校は総合的な学習の時間でビオトープについて学習してきました。そこで今日その学習の様子を発表したいと思います。



（生徒の会話）

ねえねえ、私たち3年生はこれからビオトープの学習をするんだって。
ビオトープってなに？
去年の3年生が劇でやっていたよね？
たしか学校の池もビオトープなんだって。
メダカとかホトケドジョウがいるんだよ。
コイやフナもいるんだよね。
他にどんな生き物がいるんだろう。

そこで僕たちは鶴見川流域ネットワークの先生達に教えてもらって学校のビオトープにどんな生き物がいるか調べました。昔、たくさんいたホトケドジョウは絶滅危惧種になったので大切にしましょう。私はメダカの産卵のことについて調べました。メダカの産卵はオスとメスが協力してたくさんの卵を産むそうです。

（生物の会話）

ここのビオトープは広いし、私たちの敵がいらないから過ごしやすいわ。
ほーんと。私たちも夏にはたくさん卵を産みましたよ。
ああ、ホトケドジョウ達がうらやましいよ。
ほーんと、ほんと。だってみんなに注目されてさ。
大切にされてるよね。
赤ちゃんもいっぱい産まれたみたいだよ。

（生徒の会話）

今年もホトケドジョウがたくさん増えていたね。
それにヤゴも見つかったね。」「ヤゴってなんだっけ。
トンボの赤ちゃんだよ。
プールで見つかるやつ。
ああ、そうか。あれ？ってことは、昆虫にもビオトープってあるのかな？
そうかも。私、理科の時間にチョウチョを調べていたから、チョウチョのためのビオトープを作ってあげたいな。
よし、じゃあチョウが棲めるビオトープを作ろう。
そうしよう、そうしよう。

（生物の会話）

ちょっと、今の聞いた？

私達のビオトープを作ってくれるって。
やったあ。
でも本当に大丈夫かな。

(生徒の会話)

うーん、まずは何をすればいいんだろう。
チョウチョは葉っぱを食べるからたくさん葉っぱがあればいいんじゃない？
なるほど。それじゃ6年花壇にたくさん植物があるから見に行こう。
おお！！
あ、アゲハチョウが飛んできた。

(生物の会話)

この花壇にはたくさん植物があるな。
じゃあここで卵を産みましょうよ。
でも、私たちの幼虫が食べる葉っぱがないわ。
しょうがない、他の所に行きましょう。

(生徒の会話)

あれ？せっかく飛んできたのに卵を産まなかったよ。
うーん、植物ならなんでもいいってわけじゃないのかも。
なるほど、モンシロチョウもキャベツやアブラナにしか卵を産まなかったよ。
先生に聞いてみよう。
先生、アゲハチョウが卵を産まなかったんだけど葉っぱの種類と関係あるんですか？
良く気がつきましたね。チョウの幼虫は決まった種類の葉っぱしか食べないんですよ。それを食草と言います。
やっぱりそうなんだ。それじゃあアゲハチョウの幼虫は何をたべるんですか？
うーん、それは自分たちで調べてごらん。
よし、それじゃあ図書室へ行ってみよう。
先生ありがとうございました。
頑張ってくださいね。
えーと、チョウチョの図鑑は…。あった！
どれどれ、アゲハチョウはミカンやサンショの木に卵を産みます、だって。あ！学校の西門の所にミカンの木があるの知ってるよ、行ってみよう！

(生物の会話)

あ、見てここにミカンの木があるよ。これなら幼虫にもふさわしい場所だね。よし卵を産んでおこう。

(生徒の会話)

ほらこの木、ミカンの木って看板があるでしょ。
本当だ。これアゲハチョウの卵じゃない？
すごい、たくさんあるよ。
ねえ、教室で育ててみようか。

賛成。
あ、幼虫になったよ。
本当にミカンの葉っぱを食べてるね。
新しい葉っぱを持ってきてあげようよ。
なんか鳥のふんみたい。
こうやって敵から隠れているのかもね。
すごい頭いいね。
どんどん大きくなるね。
あ、突然色が変わったよ。
すごいキレイな緑色。
あ、サナギになったよ。葉っぱみたいな色だ。
もうすぐ成虫になるね。
成虫になった。
うわあキレイ。
よし、じゃあ自然に返してあげよう。
アゲハさん元気でね。
また卵を産みにくるんだよ。
無事に飛んで行ってよかったね。
あれ、でも私たちビオトープを作るんじゃないかった？
そうだった。えっと…まずやることは。
はい、チョウがくる葉っぱを調べて紹介しあおう。
アゲハはミカンやサンショの木。
私が好きなアオスジアゲハはクスノキやタブノキという植物に集まるようです。
私も学校でアオスジアゲハを見つけることができたので、来年の春はクスノキをよく観察してみたいと思います。
学校にあるエノキにはトモガラチョウ、カラムシにはアカタテハというチョウが集まるそうです。今まで気づかなかったけど、植物によって集まるチョウが違うのは面白いと思います。
すごいたくさん種類がわかったね。
これでビオトープが作れるね。

しかし、ある休み時間に事件が起きました。

(生物の会話)

あ、卵を産んだ場所が踏まれてる、私たちの子どもは無事かしら。どうすれば卵が安全に育つのかしら。

(生徒の会話)

今日も花壇を見に行こう。
あ、ミカンの木が踏まれてる。
カタバミも。
これじゃチョウチョが来なくなっちゃうよ。
どうすればいいのかな。

ここがチョウのすみかだってわかるようにすればいいんじゃない？
そういえばミカンの木を探す時、看板があってわかりやすかったよね。
私たちも植物に看板をつけたらわかりやすいんじゃない？
ナイスアイデア、そうしよう。
じゃあさ、どんなチョウが飛んでくるかも看板に書いたら？
いいね。
よし、看板を作るぞ。
雨でも大丈夫なようにペンキで作ろうね。
トンカチ使うの難しいよ。
できた！カタバミの看板。
うまい、うまい。
よし、それじゃ早速、校庭に看板をたてるぞ、おー！
まずは植物のまわりにロープを張って。
人が通るところはキレイにしよう。
植物が倒れないように支柱をたてるといいかも。
これで看板を立ててれば。
できた！チョウのビオトープ。
たくさんチョウが飛んでくるといいね。
来年の春が楽しみだな。

（生物の会話）

すごい、看板ができてるね。
私たちの赤ちゃんも育てやすくなったわ。
私たちのためのビオトープだね。
嬉しいね、また卵を産みにきましょう。
仲間にも知らせてあげなくちゃ。
ビオトープって土や木があって、チョウのためにも作れるんだね。
ビオトープって生き物のすみかって意味らしいよ。
ってことは、学校の公園もビオトープだ。
うん、地球全体が生き物すみかなんだね。

僕たち3年生は池のビオトープを知り、チョウにとっても棲みやすい環境が作れないかと考えました。僕たちは下作延小学校のチョウが棲めるビオトープがあることをみんなに知って欲しいと思います。今年のチョウが来年もくるように、生き物らがつながるといいと思います。

【会場からの感想（抜粋）】

- ・下作延小学校はいくつもビオトープをつくり、すごいと思いました。ビオトープは色々な生き物がいるのをはじめ、チョウのビオトープを作れることを初めて知ったので、梶ヶ谷小学校でも色々な生き物をビオトープで育てたいと思います。（梶ヶ谷小学校3年生）
- ・下作延小学校で、自分たちでビオトープを作るのはすごいと思いました。（梶ヶ谷小学校3年生）

・非常に楽しい発表ありがとうございました。私も今、話を聞いてまして、アゲハはサンショの木とかミカンの木に卵を産むんですね。初めて知りました。それとみなさんがメダカ、ホトケドジョウばかりではなくて、昆虫のことまで非常に詳しく、そしてみんなで力を合わせてやることに非常に感銘を受けました。高津区の小学校がビオトープに非常に力を入れていることを聞きまして、非常に私も関心を持って見ているのですが、実は私も久地小学校のヤゴの救出作戦っていうのに2回ほど参加しまして、ヤゴを救出しました。みんなで3000匹くらい捕ったと聞いております。西梶ヶ谷小学校のビオトープも、井戸掘りにも参加いたしました。そういうことで、今後この活動が永続的にずっと続いていってくれたら良いと思っています。今日はありがとうございました。（「エコシティたかつ」推進委員・山口委員）



④小学館アカデミーむさししんじょう第2保育園の発表

小学館集英社プロダクション（保育園の運営会社）総合保育事業部・武川氏、小学館アカデミーむさししんじょう第2保育園・松田園長から園内のビオトープとそれを使った保育に関する発表がありました。

【発表】

最初に私（武川氏）の方から会社全体の説明とかビオトープの開発に至った経緯などをお話しさせて頂いて、その後園内での具体的な活動を松田よりお話しさせて頂きます。私共、小学館集英社プロダクションという名前で、小学館と集英社2社が共同で出資してできている会社になります。わかりやすいところと言いますと、ポケットモンスターやドラえもののアニメの制作をしています。ただ、一方で40年以上教育事業を運営してきたというのもあります。そのうちの一つとしてこういった保育園の運営もやっております。



保育理念を「あったかい心を持つ子どもに育てる」といたしまして、民間保育所を日本全国で約50園ほど運営しております。そのうち川崎市内では9園、高津区においてはむさししんじょう第2保育園を運営しております。保育内容といたしまして、私たち独自の学習保育を提供させていただいております。遊び生活から学びへということをコンセプトとしておりまして、子どもたちが保育園にいるうちのすべてが学びに繋がっていなければならないという考えで運営しているのですが、そのうちの1つとして大切な保育環境の1つとしてビオトープを整備しております。

こちらがむさししんじょう第2保育園の園舎の様子になります。だいたいこちらの手前ぐらいにビオトープがあるのですが、後程写真をご覧ください。緑の遊び場という名

称をつけましてビオトープの整備と、川崎市に限らず整備を進めております。私ども小学館アカデミー保育園は、保育園を立ち上げる時に必ず地域ごとにテーマをつくるようにしております。それはやはり保育園は地域に根差したものでなければならないというふうに考えているからです。

むさししんじょう第2保育園に関しては2つテーマがあります。1つ目はエコシティたかつの推進。これは高津区のみなさん断ったわけではなく、勝手に参加したという経緯で、正直言って小学校でビオトープが作られていることを私たちはつい最近まで知らなかったんですけれども、そういったところで私たちの活動が高津区さんの考えに反したものでなかったんだという風に思って、非常に感銘を受けたということがあります。ビオトープを中心にしてそういった保育環境を自然と子どもたちがふれあう環境を提供することがこの武蔵新城のエリアにおいては望ましいだろうとビオトープを整備しました。そしてもう1つがですね地域の歴史や文化を園全体で表現するというのもテーマとして掲げました。代表的なものとして、小学校の皆さんに聞いてみたいのですが、貝塚って聞いたことありますか。まだ勉強してないですか。竪穴式住居とか聞いたことないですか。貝塚というのは昔の何百年、何千年も前の人たちが貝とかを食った時にゴミをポイポイ捨てていた。それが何百年、何千年と経って今でもそれが落ちてたりする。それが出てくるってことはその昔、すごく昔にその人たちがその辺に人が住んでいたという証明になるんですね。で、そこにあるってことは、その時代の人たちが住んでいたお家もそこにあっただけです。それが、こちらです。竪穴式住居です。ビオトープで作ってしまいました。高さは3mくらいで幼児くらいであれば、だいたい10人くらいは入れる大きさになっております。

その周りを囲むようにしてビオトープ。コナラとかクヌギとか栗、ヤマザクラ、あとアケビとか、その他に色々な野草を植えた森のビオトープを作っております。手前側が畑になってましてこの後写真も出てきますが、子どもたちの食育にすごく役に立っています。もう今では大きなカマキリの卵だったりとか、先ほど小学校の皆さんが紹介していたアゲハチョウとか、それ以外にもサルノコシカケというキノコなんですが、そういった自然のものがすごくたくさんやってきて、すごくビオトープとして大きくなっています。そしてつい最近ではJHEP認証というものがあまして、こちらあまり聞き馴染みがないかもしれないんですけれども、事業活動上で生物の多様性がどれだけ守られたか、高められたかということのを数で、数量で評価していただくということなのですが、こちらでAA+（ダブルAプラス）という高い評価をいただきまして、私どものビオトープが高津区の自然環境においてすごく良いものであるということが証明されました。

続きまして、園内での具体的な活動を松田よりお話しさせていただきます。園内の子どもたちの様子を写真に撮ってきましたのでこちらをご覧ください。ビオトープは先ほどの竪穴式住居の部分と畑の部分、そして山がありましてここには丸太の橋がかかっています。赤土の部分には丸太で作ったテーブルそしてイスもあります。

これはばなな組1歳児クラスの様子です。1歳児クラスの子もたちって何ができるのかわかりますか。小学生の皆さんはずっと小さい頃で、覚えてない頃ですが、その年にお誕生日が来ると2歳になるお子さんたちがいるクラスです。まだ春の頃にはよちよち歩きで、普通の平らなところを歩く時でも転んでしまうなど、不安定なお子様が多いです。そのため、最初のうちは先生と一緒に手をつないで歩いたり、そして橋のところも先生と一緒に、これは大きいお子さんなんですが一歩一歩渡ったりしていました。少しずつ慣れてくると自分で階段をよじ登ったり、またこの竪穴式住居は保育園ではわらの家と呼んでいるんですが、階段を先生と一緒に降りていくと中の暗い様子も少しびっくりしながら見た

りしています。お子さんにとっては小さな山もとても運動面でも発達を促すための大切なものになりますし、木のチップが撒いてある道のところは土の部分と感触が違うので、ここで日常生活ではなかなか得られない運動能力を伸ばす活動ができています。

いちご組2歳児クラスはやっぱり始めのうちはこういう橋を渡る時は先生と一緒に手をつないで渡っていました。でも2歳になると少し自信が付きまして、今では自分たちで渡れるようになりました。この時には前のお友達を押さない、そして落っこちないように慎重に動くということを自分たちでちゃんとお約束を守りながら渡れるようになってきています。また植物にも興味が出てきて小さい葉っぱを見つけたり、実の中がどうなっているのか先生と一緒に実の中を調べてみたり。お子様の興味、関心がたくさんある場所になっています。

みかん組3歳児クラスは丸太の橋を渡ることも最初からスムーズにできました。男の子たちはこのビオトープの中でバッタやカマキリを見つけて虫探しに夢中でした。虫がどこに隠れているのか、いつも真剣に探していて見つけると大喜びでお友達に見せています。また丸太の下、少し湿ったところには幼虫やダンゴ虫がたくさんいました。先生と一緒に掘って幼虫を見つけて、じゃあまた春まで待ってるねとまた埋めたりしています。女の子の中には虫が苦手なお子さんもありますが、先生やお友達に見せてもらって、見ることは大丈夫ですので、それで生き物と触れ合ったりしています。お子さんそれぞれに合わせた触れ合いがビオトープで生まれています。

ぶどう、めろん組4、5歳児クラスは、今年は混合クラスになっています。4、5歳児にとっては丸太の橋を渡ったり、わらのお家に入ったりするなど、先ほどの楽しく習う楽習保育の教材である虫メガネとか、中に入れたものが上から拡大して観察できる用具などを持って、ビオトープで不思議なもの面白いものを見つける発見の場所となっています。形の違うものを見つけて上から調べると中にメモリがあって何センチかわかるようになっていきます。またアリを見つけて虫眼鏡で観察したり、そして園内には小学館ライブラリーという絵本、図鑑コーナーがありますので、見つけてきた葉っぱが何の葉っぱなのか、さっきの虫は何の虫なのかと調べたり作品にしたり、知的な好奇心を刺激するものがたくさんある状況です。食育活動、夏にはプランターを使って上に伸びる植物を作りましたが、冬はビオトープの畑で土の下に生える根菜類を栽培しました。夏の終わりに植えたものが11月の収穫ではとても大きくなりました。一人では抜きとれず、絵本のように「うんとこしょ、どっこいしょ」と大きなかぶを二人抜いたり、一人で一生懸命抜いたり、何本も大根の収穫ができました。できた大根はその翌日に豚汁作りの食育活動に使い、自分たちで切った大根がたくさん入っている大きなお鍋いっぱい豚汁があつという間になくなりました。4月に入園した時には野菜が嫌いだったお子さんがとても多かったのですが、少しずつ食べられる野菜が増えてきて、自分たちで育てることによってとても野菜にも興味や愛着が出てきて、いまでは給食で野菜が出て残すことが少なくなりました。

ビオトープが6月にできてからまだ半年です。子どもたちにとっては最初はビオトープという言葉も全然わからない状態でしたが、この半年の間に言葉も場所もすっかり馴染み、楽しいことがたくさんある大好きな場所になりました。保育園にいる間だけではなく、夕方お迎えの後にお父様、お母様と一緒に遊んでいる姿もたくさん見られます。これから初めての冬、初めての春を迎えますので、ビオトープでの新しい発見がどんなにたくさんできるのかな、とても楽しみにしています。また今後は地域の方々にもビオトープにも遊びにきていただきたいと思いますので、ぜひ皆さんもお越しください。

今、お配りさせて頂いた資料があるかと思いますが、ちょうど本日の東京新聞川崎版に

むさししんじょう第2保育園の取組みを取材して掲載して頂いたという経緯があります。こちらも読んでいただければ、当園の取組みをご理解して頂けるのではないかなと思います。今松田からもお話をさせて頂きましたが、当保育園の考え方としては地域の方々に愛されるように努力をしていきたいと考えております。ですので、堅穴式住居がある保育園は日本で他に聞いたことがないので、ぜひ見学などしていただきたいなと思います。小学校のみなさんの社会見学の一環でも受け入れさせていただきますし、また色々な形でむさししんじょう第2保育園を使っていただいて、そして好きになっていただければなと考えております。せん越ながら私どもの発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【会場からの感想（抜粋）】

- ・とても素敵な発表で自分に小さい子どもがいれば是非通わせたいなと思いながら、でも本当は孫になるかもしれませんが、そう思いながら拝見していました。やはり土に触れるというのは汚れるではなく、土は汚いではなくて、とっても豊かなものだとこのことを子どもたちは毎日感じながら、教育を受けているのだと思いながらうらやましく感じました。やはり触れない子どもたちって、私どもの学校にもいます。土に触れない、水たまりに入れないなど、小学校にもいっちゃうかもしれません。こうやって見せていただくと、色々なものを生み出す、豊かなものを秘めている物に触れるということが特に小さい頃には大事なんだろうという事、改めて感じました。ダンゴムシは子どもたちにとって永遠の宝物ですよ。そういったことをとっても再認識させていただきました。どうもありがとうございました。（市立養護学校・荒井教頭先生）

- ・アカデミーむさししんじょう第2保育園には私のお邪魔したことがございまして、本当に園庭が土なんです。一番感動したのはそこです。そしてあの、木が朽ちると言いますか、葉っぱが落ちたその状態でその上をやっぱり踏んで子どもたちが遊んでいる。環境教育、特に環境教育ですけれども、私たちが子どものころ時、色々な体験をしてきています。土に触って虫に触って、そして虫を捕まえて、その虫を観察したりしながら大きくなって



いくんですよ。大人になって初めて環境教育って言われても「あ？」っていう風にみなさん頭の中でイメージされると思うんですけども。この環境教育こそ子どもの時から土に親しむ、虫に触るっていうことが大事な一歩なんじゃないかなと思います。今日は発表して下さった小学生のみなさんもですね、下作延小学校のみなさんの言葉がすごく私は印象深かったのですが「地球全体が生き物のすみか」っておっしゃって頂きました。その通りで、やはりこの環境、高津の環境をやっぱり目の前にある所から、こう私たちが意識していかななくてはいけないのかなという風に思いました。素晴らしい保育だなと思いました。それで小学校、中学校そして養護学校、すべての高津にある小学校を生き物が回るようになるという風に思いました。思い描いていたのが、ヤゴが梶ヶ谷小学校からのヤゴが大きくなって、そして下作延小学校に飛んでいくとかね。そしてまた下作延小学校で育てたチョウチョさんがまた小学館アカデミーむさししんじ

よう第2保育園まで飛んでいくとか。そういう様な事が、生き物の交流ができるともって素敵になるなという風に印象を持ちました。ありがとうございました。(高津区役所こども支援室・三ツ木室長)

(2) 表彰

「エコシティたかつ」推進会議・岸委員長より表彰とプレゼントの贈呈。

(3) 岸委員長より講評

ビオトープについて楽しい発表をして頂きました。みなさんも充分楽しんで頂けたと思うんですね。今、表彰状の中にビオトープづくりは気候変動のカオス、気候変動の適応策、生物多様性保全、3つの貢献だというなんか難しいことが書いてあって、子どもたちは何もわからないと思うけれど、ビオトープづくりの楽しさは充分伝わったと思うので、ちょっと難しい話を含めて2つ短くさせて下さい。



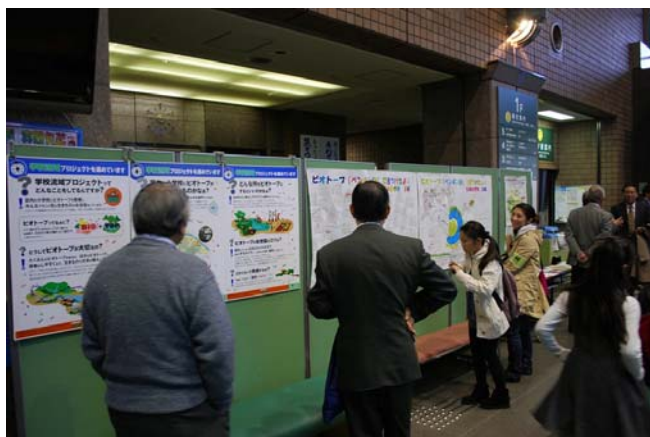
ビオトープというのは「バイオ」という言葉と「トープ」という言葉、「生命」と「場所」が結合した言葉です。トープというのは場所、普通小さな範囲を考えますけれども、国際的には広くたっていい。一番広い場合はビオスフェアと言います。ビオスフェアというと地球のことです。だからビオトープは地球に繋がっている、その通りなんですね。地球を小さく分けていくとビオスフェア、ビオリージョナリー、ビオトープになるそれだけのことなのです。特別に作らなくてもあなたがいるところがビオトープです。ただ、そう認識する力を私たちは失ってしまった。さっき下作延小学校の子どもたちが「チョウチョどこにいるかな?」「ミカンの木にいた!」と言っていました、それはビオトープを発見したということなんです。ビオトープは作らなくていい。みんながこれがビオトープだと発見すれば、それを大切にすることによってビオトープの良さになる。みんな地球が大事な生き物世界だと忘れちゃっているわけだから。これから学校だとか保育園だとか、いろんな所でビオトープの良さを知っていかなければいけない。実は足元のこの地球はビオトープだったと発見する。長い、長い道が始まっているということです。

エコシティたかつのビオトープ宣言というのは学校ビオトープ、学校流域。これについてお話しします。流域というのは、雨の水が集まる範囲のことを流域と言います。温暖化で豪雨が来る、土砂災害が来る、じゃあそれどこで対応するの?川崎市で対応する、横浜市で対応する、東京都で対応する、それは常識ですが、実は洪水を起すのも、土砂災害を起すのも、行政区域ではありません。流域という雨の水が集まる、地形的な単位であり、それは世界中どこでも同じ。それをこれからまた、あまり時間かける余裕はないですけど、世界中が思い出さないと、大雨に対する対応はできないですね。この間、フィリピンの台風・ヨランダも同じです。流域を思い出そう。じゃあどこから思い出そう。流域って大きい流域も小さい流域もあるけど、学校から思い出そうよ。学校というのは1haぐらいの大きな地面ですが、そこに降った雨をそのままダラダラとあちこちに捨てずにまとめる。その学校が1つの流域です。水が集まる範囲です。集まった水を何に使うの?まずは水のバイオ

トープにを使って、トンボやゲンゴロウや空を飛んで移動してくる生き物たちをおもてなしする場所にしたらいいじゃないか。その水を使ってチョウチョがうれしく育つ植物をいっぱい繁茂させて、チョウチョのおもてなしをしたらいいじゃないか。まずはそういう風に役に立てましょう。夏の暑い時に水をまいたら校庭は気持ちいい。その時に水道水じゃなくて学校に貯めた水を使ったらいいでしょ。学校に降った雨、例えば1haに時間50mmの雨が降れば500tの水になる。それを全部流さないでうまく貯めて、水のビオトープにも草っぱらのビオトープにも木立のビオトープにも使いましょ。散水して校庭を気持ちよくするのに使いましょ。みんながちょっと汚れ物を洗う、そんな事に使ってもいい。実はエコシティたかつの学校ビオトープ戦略というのは、そこまで考えています。ようやく生き物についてビオトープおもしろいねという輪が広がってきました。もうすでに先に行っている小学校は、学校内に降っている水で池のビオトープをつくっているんです。次はそっちへ行きましょ。そうなったら5、6年生とか難しいことがわかって体力のある子どもたちが参戦してくるでしょう。そういう見通しがそろそろついてきたなあいう、大変嬉しいことです。学校流域プロジェクトは、生き物のことだけやっているわけじゃない、温暖化適応策をやるんだということです。

もう1つ手短かに言います。今日保育園が参加してくれた、養護学校が出してくれた、小学校が出してくれた、こういった多様性がとても重要です。幼稚園も参加して欲しい、中学校も高等学校も参加して欲しい、企業もありとあらゆるところが参加して、流域ビオトープ戦略があったら素晴らしいことだなと思います。今東芝の本社アドバイザーをやっており、世界の全東芝の工場に対してビオトープをつくれと指令を出し始めています。足元から始める、チョウチョのビオトープ、水のビオトープなんでもいい。とにかくまず、自分たちが仕事をしている敷地から生き物の多様性をおもてなしする場所を作っていこうということが始まります。企業も参加してくると思います。そういうとても大きな仕事がここから広まっていくんだと希望が今日伝えられたと感じました。ありがとうございます。

【休憩タイム】



学校流域プロジェクト等のパネル展示



たちばな野菜のみそ汁を楽しむ

2 【第二部】パネルディスカッション

田 中：どうもみなさん休日の午後というところに来て頂きありがとうございます。明治大学の田中でございます。明治大学の理工学部が多摩区の生田キャンパスにございまして、理工学部と農学部があるのですが、理工学部の建築学科で建築の計画図の設計を教えています。平成20年「エコシティたかつ」の推進方針をつくることから、こちらの方で委員をさせて頂いております。



今日の後半の司会進行をさせて頂きたいと思います。まず、私の方から簡単にパネルディスカッションの進め方をご説明して、それから次に企画課の方から「エコシティたかつ」について言葉を頂きたい。

「エコシティたかつ」を始めたのがもう2008年ですから6年程前になりますけれども、当時はまだ良く分からなかったことが最近すごくリアリティを持って感じられることが多くなってきました。お話しでもありましたように豪雨が降ったり、非常に大きな自然災害が最近目立つようになってきました。色々な意味で気候が変わってきているという実感があります。それとともに2011年に東日本大震災があって以降、様々な形で防災に対するみなさんの意識も変わってきましたし、まとまりの単位もまずコミュニティで考えなければいけない事態になってきていると思います。

それで、今日このパネルディスカッションのテーマである「エコ・コミュニティ」って言葉なんですけど、私自身も、これは一体何だろうと今も思っています。後でご紹介ありますが、私たちがつくったエコシティの推進方針はいくつかの段階がありますが、長期のちょっと先にやるプロジェクトとして「エコ・コミュニティ」を推進方針に書き込みました。来年以降やることの中に、このプロジェクトの射程が入ってきます。それとともに今まで過去に色々な形でエコシティの取り組みを進めていますので、今日はこの場を借りてその活動を振り返りながら、この「エコ・コミュニティ」とは一体何なのかをみなさまと一緒に考える機会にしたいと考えています。後ほど今日来て頂いたパネリストの方を紹介しながら活動をご紹介頂きたいと思います。

ではまず、最初に高津区の企画課の方から「エコシティたかつ」のご紹介をお願いします。

(高津区役所まちづくり推進部企画課より「エコシティたかつ」推進事業について説明)

田 中：ありがとうございました。それではこれからみなさんの活動などを聞きたいと思いますが、今日会場に高津区の1/4000の地形模型があります。見ていただくと多摩川沿いの割と平らな所と割と丘陵部のデコボコな所があり、その中で流域というまとまりがある単位があります。模型には小学校区、小学校の位置がプロットしてあり、高津区内の小学校が15校ありますが、子どもたちが歩ける範囲という

中で土地それぞれにまとまりがある空間があって、そこに様々な主体の活動が根付いているということです。今日お招きしたパネラーのみなさまは、そういう中で色々特徴のある活動をされてこられたということです。まず、最初は私の方から順番にマイクを回して、取り組まれている活動について簡単にご紹介いただければと思います。それではまず川崎市地球温暖化防止活動推進センターの笹子さんです。よろしくお願ひいたします。

笹子：みなさんこんにちは。川崎市地球温暖化防止活動推進センターの笹子と申します。それでは座らせていただきます。私たちのセンターの取組みというのを少し簡単にご紹介させていただきたいと思ひます。この「川崎市地球温暖化防止活動推進センター」ととても長いんですけども、実はこれは2010年12月に川崎市の方から指定をうけて運営しております。もともとは県に地球温暖化防止活動推進センターがあったんですけども、法律が改正されて温対法（地球温暖化対策の推進に関する法律）が変わりまして、政令指定都市にもセンターが設けられるということで、川崎市が作ったというセンターです。まだ始まって3年目ということで、3年間の指定なので今年度が最後なんですけれども、始まったばかりという、まだ新しいセンターです。

今まで3年間やってきた取組みとしては、まず、いかに知って頂くか、このセンターのことを知って頂くかということがこの活動の中心になって来たんですけども、高津の市民館は丸井11階にあるのですが、そちらのフロアの1箇所をお借りして運営していますけれども、その場所を利用して毎月テーマを決めて色々な活動を紹介したり、団体を紹介したりすることが大きな取組みのひとつです。また、立場的に一般市民、私たちも市民なんですけど、市民と事業者、色々な企業、臨海部の工場を結びつける、連携する、紹介するという、そんなような取組みもしております。

センターはNPO法人のアクト川崎が指定を受けて運営しています。なのでもともとの活動はNPO法人が活動している取組みになります。その中の1つで、やはり3年前の7月から川崎市が雨水貯留槽の設置に対する助成金を出していただいて、その受付の手伝いもしております。ですので、今年で3年目ということで雨水の貯留槽を設置する助成金の受付もやっています。また、先ほどお話しがあった、CO₂を減らすということで川崎市内の町内会や自治会、マンションなどで色々な節電のお話しをさせていただいたり、省エネの取組みのご案内をさせていただいたりということも中心としてやっています。あとは川崎市内の一般の家庭からどれくらいCO₂が排出されているかという実態調査なども行っています。大ざっぱな取組みとしては以上になります。

田中：はい、ありがとうございます。今、ご紹介にあったように省エネ関係の色々な取組みをされていらっしゃるということで、エコシティの中でも緩和策と適応策をうまく組み合わせてやってきていますが、雨水に関することをご紹介頂きました。それでは引き続き高津区民として関わっていらっしゃいます横山さんです。

横山：こんにちは。今、紹介がありました横山と申します。私は今日のパネラーの方の中では肩書きの無い市民ということで参加させていただいております。高津小学校のすぐ近く、高津図書館が含まれている地域が私の所属しております溝口第2町会です。今日、私が報告するのは溝口第2町会の中で色々な取組みをやってきたということで、その一部をご参考までにお話しします。溝口第2町会では町会

として色々なこともやっております。

大多数の町会がみなさんそうだと思いますが、特に私が関わっていることで言えば、ゴミの問題。溝口第2町会内を大山街道が通っているわけですが、そこにあるゴミ集積所が非常にゴミで散乱しているという問題が数年前にありました。ゴミがゴミを呼ぶという形で通行人の人がポイ捨てをしていくというところがあって、これはなんとかしなければいけないということで、私はゴミ減量指導員になりましたもので、それでその利用者の話し合いの場をつくるというようなところから始めたのが環境問題の取組み。ゴミの行方を訪ねるバスツアーというように、町会の有志の方と行政のバスを利用して頂いて、宮前生活環境事業所に収集されたゴミがいったいどういう風に流れてくのかということで、中間処理場、それからご存知だと思いますが、梶ヶ谷の貨物操車場がありまして、そこから地下を通過して、川崎の浮島の方までゴミが運ばれていくということ、中間処理場も含めてバスで見学をしました。その先々でどんな風にゴミが扱われていくのかということを見てきました。ただゴミを朝出してしまえば終わり、あとは人任せではなくて、やっぱり自分たちの出来ること、私たちの生活の中でできることに取り組んでいく。そのような取組みをみなさんに呼びかけてやってきました。

溝口第2町会には会館がございます。町会で独自の会館を持っている所は高津区の中でも数が少ないと聞いております。第2町会の会館が今までプレハブだったのですが、新たに建て替えるということで川崎市のご援助を得ながら会館の建て替えをやりました。その建替えを契機に雨水利用できないかということがありました。これは先ほど田中先生から話しがありましたが、3.11を受けて地域での防災をリアルに考えなければならないということが1つの契機でした。井戸を掘るというテーマもありました。そこでまず雨水の利用について、笹子さんの方から川崎温暖化防止活動推進センターの方で雨水貯留層の助成を行っているというお話がありましたが、第2期のエコシティたかつだったと思うんですが、その中で雨水貯留層をモニタリングして欲しいという依頼がありまして、それで第2町会としても応募しまして、1年間モニタリングをやるということになりました。その他、溝口第2町会では個人宅で雨水利用をしている方がいらっしゃいます。このエコシティたかつの助成を得て設定した貯水タンクは、いわゆるビア樽で1ガロンの木製のタンクです。容量がだいたい1800くらい入るのではないかと思います。雨水の利用はある意味簡単にできる。貯蔵タンクと雨どい、縦どいのところに集積リングをつけるだけ。それだけで雨水を貯めることのできるわけです。当然、貯蔵タンクに蛇口がありまして、適宜貯まった水を出すことができるわけです。問題はどの程度貯まるのか、そしてどういう風にそれを活用するのか、ということです。今年ですが、先ほどお話がありましたように、集中豪雨、ゲリラ豪雨など、非常に激しい変動が顕著にありました。雨がたくさん降ると貯水タンクがすぐ一杯になってしまうんですね。そしてオーバーフローする。オーバーフローはオーバーフローで当然下水の方に流れるので構わないんですけど、日照が続くと雨水がなかなか貯まらない。雨水を主に何に使っているかと言うと、植物の水やりですね。高津小学校のすぐ隣にありまして、そこにスイセンを植えて、スイセンロードをつくらうなんてことになり、その植物への水やりに使いました。それから日照りの時の打ち水。そういったことに使うが、大きなじょうろ 5、6

杯くらい使うとすぐ無くなっちゃうんですね。木製の樽ですので、水を全部使いきってしまうと木は収縮し、水漏れが起きるのではないかとということがありました。若干水を残しておくという工夫をしておりました。そういった意味で、180ℓくらいだけだと、そうした自然の変動に対してタンク1つだけではうまく対応できないという感じを持ちました。今日、午後から小学校のビオトープの話がありました。是非、ビオトープのような形で雨水を利用する、溜めておくといったスペースがあると、今、私が述べたような雨水貯蔵タンクと連動させることも合わせて色々な工夫ができるのではないかと感じた次第です。また、後ほど報告したいと思います。以上です。

田 中：はい、ありがとうございます。大山街道は非常に歴史的な場所でそこにある町会のコミュニティの中でゴミ、雨水についての活動をされているというお話しでした。両方とも捨ててしまっていて無関心で後がどうなっても知らないという、色々な問題があるわけなんですけれども、そういう所に関心を持って循環型の社会をつくっていくための発端なのかなと思ってお聞きしました。それでは次の方に行きたいと思います。次はNEC インフロンティア株式会社の酒井さんです。よろしくをお願いします。

酒 井：みなさんこんにちは。只今、ご紹介にあずかりました、NEC インフロンティア株式会社・酒井と申します。弊社、大正7年、1918年の創業でまもなく100周年を迎える企業でございます。所在地といたしましては府中街道を小杉方面に向かってですね、ちょうど第三京浜にぶつかるあたりに所在しております。事業内容といたしましては、電機、電子、通信機器という事で、みなさんの分かりやすいところで言うと、企業向けの電話機ですとか、あとはPOSですね百貨店などのレジ、それからレストランや飲食店へ行った時のオーダーをとるシステム、そういった物を開発、製造、販売をしている会社でございます。

これまでもエコの取組みという事で色々な事をやってまいりました。2003年に弊社事業所の隣に東高津小学校があるのですが、5年生の児童を毎年招いて環境教育を開始いたしました。その取組みも現在まで11年続いている取り組みでございます。それから2005年には川崎駅前の花壇の植替えのボランティアに参加し、協力させて頂いております。それから2010年には地産地消とリサイクルで何かできないかということで弊社事業所1000人程度の従業員がいますが、社員食堂でどうしても残飯が出てしまうので、これをゴミとして捨てるのではなく、社内にあります生ゴミ処理機でコンポスト化してなんとか利用して頂けないかということを進めてきました。これまでは引き取り手がなく、埼玉県の生産者のほうにお譲りして利用してもらっていたのですが、2010年からは同じ高津区内にあります小宮農園さんがコンポストを引き受けてくださって、有機肥料として利用してくださっています。そこで小宮農園さんが有機栽培された食材を今度は我々がまた食堂で利用する、あるいは売店で社員に販売するといった、リサイクルと地産地消がうまいこと回っているという活動も行っております。

これまでは比較的小さな所で、あまり土地を持ったりしているわけではないので、活動する土地が無かったのですが、2012年度に川崎市の方から「特別緑地保全地区があるのだけど、緑地の保全をやってみませんか？」とお声掛けいただきました。1年かけて5ヶ年計画を立てまして、2013年度から久末東にあります特別緑地保全地区の緑地管理を開始いたしました。こちらの緑地は、先ほどもご説

明ありました地形図を見ていただくとわかるのですが、久末小学校のある所なんですけれども、高津区内では非常に高い場所に位置している緑地でございます。先ほどの流域で言うと、鶴見川、矢上川のあたりに流れ込むと思うのですが、非常に手の入っていない、30年40年以上放置されてひよろひよろとやせ細った木がどんどん丈が高くなっちゃって、日の当たらないような緑地になっておりました。そういった意味では、雨が降っても保水性があまり無く、どんどん流れていってしまうだろうということもございまして、何度か古くなってしまった緑地を新しい形で若い力を持った緑地に再生できないかということで今年から作業を開始したところでございます。引き続きこちらの方は川崎市、地域住民と三者協働で取り組みながらよりよい形で進めていきたいなと思っております。以上でございます。

田 中：はい、ありがとうございます。少し前になるかもしれませんが、企業市民という呼び方をされていたこともありました。企業も地域に長く立地すると、色々な形で活動が展開されていくんだなというお話だったと思います。その中でも小学校の環境教育、農家の生産者、最後の緑地の管理など、企業ではない他の方々とのコラボレーションは大変興味深いお話しとして伺いました。それでは次のパネラーの方に移りたいと思います。たちばな農のあるまちづくり推進会議の仲村さんです。よろしくお祈いします。

仲 村：みなさまこんにちは。おみそ汁を食べて頂いたでしょうか。このおみそ汁の材料全て小宮農園さんの今朝採れたばかりの野菜を使わせて頂きました。私たち、たちばなのまちづくり会議では、私は新住民になると思うのですが、この都市の中で驚くほど農地がたくさんあるという事実を知らない方が多いということで、なんとかそういう環境を知っていただきたいということを中心にこの活動を始めました。私たちが守るわけにもいかないの、私たちがそのできたものを消費すること、地産地消ということでひとつ応援ができるんじゃないかということで、年4回ファーマーズマーケットとして「さんの市」をやっております。それから中原区の新城の駅前にはなってしまうのですが、橘地区の私たちの足でありますそこにNPO法人ぐらす・かわさきさんが“メサ・グランデ”という八百屋兼カフェをつくってくれました。そこを拠点として八百屋事業、食の提供ランチ、ディナーなどの提供を応援しております。それから環境資源としての農地って言うよりも、都市農業を少しでも応援できるような形で援農、それからプチ農体験、それから歴史がすごくたくさん残っている橘地区と農地をからめた歴史を巡るツアー、地域散策などの事業を展開しております。

今日私だけがみなさんと違う格好をしておりますが、実は午前中、9月に子どもたちと小宮農園さんの土地をちょっとお借りして種まきをいたしました。今朝、最終回で収穫祭をやりまして、おみそ汁で食べて頂いた聖護院大根やお漬け物として提供しました赤い大根は、その9月の時に種を蒔いたものでございます。あんなに大きくしてくれたのは小宮農園さんなんです。それでも子どもたちとそういうことをすることで、次世代に少しこういうことを継承していける何かきっかけになりはしないかというふうに位置づけて事業を組み立ててみました。

これからはもっとたくさん、今でももう十分に色々な団体さんと連携して、私たちだけではやりきれないところをカバーして頂いているんですが、これからはもっともっとたくさんの方とつながって、それで団体に所属していないんだけど、

何か手伝いできるかなってという市民の方と実動部隊としてチームを組んで、参加して楽しい、それと次代につなげられるような何か夢のあるイベントを色々企画したいと思っています。

今日、嬉しかったことは、今日最終日なんだけど参加したい、というとても若い青年が一人来てくださいます、近くの障害者の方の作業所にお勤めしているという方で、色んなことを考えているうちに、やっぱり地域で色んなことをしているところとつながるのがいいんじゃないかと思って、インターネットで調べて「高津の農業」と検索したら、「たちばな農」が出てきたと言っていました。そこから今日のイベントを知ったということで、これからそういう形で、新しい時代の色んな便利な物を取り入れながら、今までそういうことに縁の無かった方ともご縁を頂きながら、活動していきたいと思っています。

田 中：はい、ありがとうございます。都市農業にかかわるその他の取組みの話を伺いました。考えてみると川崎市の市域は約400年前に開設された二ヶ領用水の流域が基本になると言われていますけれども、二ヶ領用水はもともと農業用水として使われていたものですから、農業として土地がずっと使われてきたんですね。それがおそらく最近60、70年ぐらいで住宅を中心に市街地になっていった高津区なので、まだまだそういった物が残された状態なんですね。農業は一見、過去のものと思われかもしれませんが、最近すごく若い方も関心があるようで、未来に向かってどのように使っていくのかという話だと思いました。そして最後のパネラーになりますが、高津区まちづくり推進部企画課の課長でいらっしゃる宮川潔さんです。宮川さんからは行政がやっていることを紹介頂ければと思います。よろしくをお願いします。

宮 川：高津区役所でエコシティたかつを担当しております、企画課の課長をしております宮川と申します。本日はよろしくお願いします。今の田中先生のお話しにございましたように、区役所の取組みの紹介ということなので、先ほどの説明と大分ダブるような部分もあるのですが、エコシティたかつは、区の行政区を単位とした事業をやりながら、流域というスケールに着目して事業展開していることが特徴の事業です。先ほどからの繰り返しになってしまうんですけど、住民のみなさんに一番近い、固い言い方しますと基礎的自治体の区役所が流域に着目して事業をやっているわけなんですけど、着目する場合に2つのアプローチがあるじゃないかというふうに私は考えています。

まず1点目は直接的な意味合いで、自分の住んでいる所、どこの流域に属するのかそれを意識できる、地に足の着いた活動ができるということです。ひとつの活動としてもおのずと限界もあるんですけど、高津区は地形的に見ても、先ほどお話しありましたが、地形模型図を見て頂くと、南には末吉台地が広がってしまっていて、また、その崖線と台地のところと、多摩川方向にも開かれた平地があり、4つの地形がございます、これが大小の流域に、それぞれの流域に根ざした緑地保全や健全な水循環を構築していけるというような啓発、活動を実際にされている方の支援を行っているところでございます。

もうひとつのアプローチとしまして、流域という概念が自分たちにとってわかりやすいスケールで考え直すというものです。第1部で発表して頂きましたのが、学校流域プロジェクト。この取組みは学校を流域と見立てまして、健全な水循環と生物多様性のモデル基地にしようというふうなものでございます。そちらの方

でビオトープの雨水活用が進んでいけば、先ほど横山さんの話しもありましたけれども、流域的な話しになります。それぞれの人がイメージしやすい大きさで流域という概念がもっと身近なものになればという取組みをしているところがございます。とりあえず私の方からは以上です。

田 中：はい、ありがとうございました。高津区の方の取組みについてお話しいただきましたけれども、今のご紹介でも何度も流域というキーワードが出てきていましたので、テーマである「エコ・コミュニティ」の議論を深めて、あと結論に至るにはとても時間も足りないですし、1順目のみなさんの発表が充実していたので、ここまでかなり予定よりも時間を押して話しをいっておりますので、このあと少し私の方で話しを整理して、みなさんから逆にお話しを返していただこうと思います。

今、最初に言葉が出てきた「流域」ですが、前半で学校流域プロジェクトのご紹介がありました。小学校区というのは子どもが歩ける範囲ですから、まとまりのあるコミュニティや単位になりますし、ある具体的な場所にもあるし、そこに雨が降れば水が流れていくわけですね。こういうところで多分色んな活動をしていくっていう、前半の発表にあったような内容というのは色んな意味で示唆に富んでいると思います。それで特にコミュニティの問題を考える時に、やっぱりその地域のまとまりのある空間の中では色々な立場があって、色々な活動をしていくということになりますので、それをどういうふうに出会わせたり、つなげたり、そういうことが意外と大事になってくるのかなと思ったりもします。

あともう一つ、小学校の発表でも、みなさん親御さん、地域のお年寄りの方も含めて、非常に熱心にサポートしてくださっているんですね。それはやっぱり未来の世代への何かをしていこうという思いなんです。自分のために、来週とか1年後どうなってるというもう少し長い時間で。考えてみると環境と言うのは長い時間で変化したり、起こってくるものですので、時間も長いスケールで考えていくことも役に立つのかなと思います。例えば、このことを流域にひっかけて流域で考える、そういう空間のまとまり、あと時間のスケールのような。そういう流域のスケールみたいなものでコミュニティの問題を考えていくのも非常に大事なことなのかなと思います。

ちょっとそういうような事を少し示唆してみて、みなさんの方から、こんなことができたなら素敵なんじゃないだろうか、すでにやってこういうことがあったんだけどもっとこういうことができるんじゃないだろうか、ということを感じた点、少し展望など、あるいは経験談みたいなものがあれば、お一方お一言ずつ頂ければと思います。ちょっと司会の不手際もあり少し遅れ目で進行してしますので、5分と言わず2~3分位で返してきて頂けるとありがたいですが。宮川さんは先ほど区の方のおまとめいただきましたので、仲村さんの方から逆順で一言ずついただけますでしょうか。よろしくお願ひします。

仲 村：流域ということ意識してやったことはないのですが、先ほどの一部の方でありましたデコボコのある、まとまりのある空間という言葉に、まさに私たちがやっていることはそれだなと思いました。久末地区という所は本当にまだ農業者さんがたくさんいらして、嬉しいことに後継者の方もしっかりと育っています。みなさまの努力なんだと思うんですけども、若い農業者さんが多かったです。その土地のデコボコだけではなく、私たちが関係する年代のデコボコなども感じ

ながら活動しています。久末地区、橘地区と言ったら久末地区、新作、千歳、末長という感じなんですけれども、それぞれの地域にそれぞれの良さをもった生産者さんのみなさんをつながりを持ちたいと思っています。ただ、生産者の方がとってもシャイなので、私たちの方から積極的に声かけしないとなかなか前面には出てきてくださらないものですから、関係のない私たちが大きなお世話をしながらやるしかないかなというふうに思いました。流域という難しい言い方よりも、自分たちがやっていること、ちょっと足元を見ながら暮らしということを考え始めたら、エコということにつながって、それが結局は環境保全だったり、これから子どもたちに残していきたい色んないいものだったりということに気がついて活動が進められております。

田 中：はい、ありがとうございます。大地のデコボコ、年代のデコボコのあるまとまりの空間にしていく知恵をお話しいただきました。それでは引き続き酒井さんの方から何かお気づきの点があれば。

酒 井：先ほどちょっと話したのですが、久末の話です。久末の方で緑地保全を開始したのですが、まだちょっと危険な状態です。危険というのは木が古くてちょっと風が強い、台風が来たって言うと、けっこうな大木が上の方で折れていつ落ちてくるかわからないという状態がまだ続いているものですから、我々の社員を集めて緑地保全する時にはまだ家族、子どもたちは連れて来ないで、また、すぐ近くにある久末小学校では子どもたちにまだ入らないでくれという指導、子どもたちだけでは入らないようにしてくれと指導されているということです。1年活動してだいぶ木も伐採して、明るくはなってきたのですが、まだまだちょっと時間がかかるかなと思っています。先ほど仲村さんの方からもありました、久末の方は農地が多くて、だけど跡継ぎはしっかりできているというお話しいただきました。企業として久末の緑地保全を開始したばかりですけれども、10年、20年、30年先って言ったら、どうなっているかまだわかりません。そういった時に子どもたちに今活動に参加してもらって、「いや、この森、僕たちの森残そうよ」と思ってもらえるように、それこそ僕らの跡継ぎを探すような活動をしなくてはいけないかなというふうに思っております。

田 中：はい。おそらく企業さんなので、たぶんある種のCSR活動みたいなことでやられているんだと思いますが、そういう地域の中で次代へつなぐという話しだったかなと思います。それでは引き続き今度は横山さんお願いします。

横 山：時間が押し迫っているようですので、あまり長い話ではなくて。先ほど仲村さんから非常に肝のある話がありましたが、先ほど申しましたように私は溝口第2町会ということで農地が無い。高齢化が進んでいて、何か集まりごとをやってもなかなか若い人が集まらないというような状況で、そういった意味で年齢のデコボコというのはなかなか見えない。デコボコが見えるようになるって事は非常にいいことだなという風に思うのですが、それが現実。

もう一つはアスファルトばかりで大地のデコボコ、水の流れがほとんど見えない。こういう状況が私ども第2町会の現実なんです。ただ、近くに高津小学校がある。いつぞや岸先生から鳥の目で見ると、鳥瞰をするという話がありました。なるほどと私は思いました。たしかに生命が多様に生きるってことは地域なんであって、地域の一部だけではない。そういった意味でその緑の少ない第2町会だけれども、一軒一軒でそれぞれ庭木があったり、あるいは植木があったり、そ

の道路の脇にプランターが置いてありって所があるわけです。そういう所を見ると、鳥の目から見るとそういうものをつなげていく、そしてネットワークをする、というようなことができればよいと思う。

もう一つは先ほど言いましたように高津小学校が近くにある。小学校の連携はできるようでなかなか難しい。小学校は結構壁があるわけです。PTA や学校関係者だと入りやすいかもわかりませんが、地域一住民と言ってもなかなかスムーズにいきません。そういった意味で小学校のビオトープをその運営するのに、なんとか地域で関われるようなことはできないか。今後考えていきたい。ただ、まったく可能性が無いわけではなく、行政とタイアップしながら、鳥の目で地域全体を生物多様性のある、そういったものにつくり変えていく。そういったことは是非、目指したい。

最後ですけども、コンクリートが覆ってるわけですが、そのコンクリートも是非、浸透性のあるアスファルトに変えるなど、工夫が色々あるのではないか。それができればもうちょっと水の流れが見えてくるのではないかという感じがしています。私の町会には側溝が暗渠になって覆われているわけですが、一部蓋が空いている所があります。そこに小学生の子どもたちがスルメをたらして何か釣っているんです。何を釣っているのかと思ったらザリガニがいるんだと言うんです。つまり昔、田んぼがあった所の水路が暗渠になっている。そこには依然としてザリガニがいるんだということを小学生が教えてくれたことがありました。なんかそういった意味で、アスファルトばかりになっている所ももうちょっと工夫をして変えていって、新しい高津のまちづくり、地域づくりに取り組めればよいなというのが私の夢です。以上です。

田 中：はい、ありがとうございます。群で考える、非常におもしろい考え方ですね。一つひとつでは小さな取組みでも、それが有機的につながることによって色々なことができる。色々な可能性を感じさせるお話だったと思います。それでは最後になりますけれども笹子さんの方からお願いします。

笹 子：センターの立場としましては、普及啓発がメインと思っていまして、先ほど言いましたけれども、毎月行っていますテーマ展示では地産地消、自然、緑、生き物、水も結構テーマにしている月があります。その辺を色々な方たちと連携しながらどんどん進めて行きたいなと思っています。特に来年度は取り上げることができたらビオトープなんかを中心にご紹介したいなと思っています。

あと、雨水については、窓口、相談窓口みたいなのが常設できるぐらい普及できたら嬉しいななんてふうに考えたりしています。お問い合わせはセンターにいてあるんですけども、前の日に雨が降ると翌日お問い合わせが増えるんですね。だから、やはり雨水をなんとかしたいっていう思いをもってらっしゃる方たちは多いのかなと思うので、その辺が増えてきたら嬉しいなと思っています。以上です。

田 中：よいか悪いかわかりませんが、非常に豪雨が増えていますから、関心が沸いてくるかもしれませんね。おそらく今までセンターの中でも取り組まれた事もあるんでしょうが、それを越えて色々な広がりが出てくると良いと思いました。

という事で本当はこの後もう少し「エコ・コミュニティ」に関する議論を深めたいところではあったのですが、みなさんとお約束している時間がそろそろ近づいてまいりましたので、今日の所で、今までの中で話されたことを少しまとめさ

せて頂いて、さらにこの次の機会に深めていきたいということにさせて頂ければと思います。

今日みなさまの話を伺っていて思ったのは、この中の多くの方はエコシティの推進会議の委員でいらっしやって、そういう場でお話し、意見交換をする時もあるわけですが、こういう形で具体的な場所の活動を照らし合わせて話しをするというのはとても大事なことだと思います。今日は仲村さんも来ていただいて、これもたぶん高津との大事な事業として「たちばな農のあるまちづくり」みたいなものとか、どのような接点があるのかというのも聞いたのは非常によかったと思います。やっぱり、コミュニティというのは実際形のないものであるわけですが、されどもうそれはどこかの空間にあるので、それは何度も出ていますように大地のデコボコなどの具体的なまとまりのある空間にあるわけです。その場所にふさわしい活動がうまくつながれるような接点をそこにいる多様な人たち、住民の方もいるでしょうし、住民だけではなく企業の方もいらっしやいますでしょうし、より公共的な立場で行政であったり、NPO みたいなセクターで関わってくる方々ともつないでやっていくというのが非常に大事なのかなと思いました。

「エコシティたかつ」は 100 年後の高津を目指すという壮大な目標を掲げているので、やはりそういうことを実現するような力、多様なセクターの協働から生まれてくるのが大事なのかなと思います。

ちょっと話を聞いていて思いついたことでもあるのですが、私の方から 3 つ程、そういうものを実現するために大切な力みたいなものが大事なんじゃないかと思うので、それを提案して今日の議論を締めくくりたいと思います。

1 つは越境する力じゃないかなと思うんです。私、冒頭にお話ししましたように、理工学部の教員なんですね。なんでこのエコとか生物多様性とかやってるのかと良く言われるんです。でも私にとっては自然なことなんですけど、多分、他から見ると学問領域を越えて変な所に関わってませんかってことを考えてるんですね。自分の学問領域の中だけではこうだよねっていうことで非常に快適でいられるわけです。それを違う考えや価値の方と色々触れて、そこでたぶん色々な新しい発見や色々な可能性が出てくるじゃないか。そういうふうに自分の領域を越えていく力ってのが 1 つ大事なんじゃないか。

あともう 1 つは柔軟に対応する力。おそらく計画通りいかないこともあるし、先ほど色々な方が指摘されたように、活動していく中で発見があったり見つけられるものがあつたら、こういうふうにしたらいじゃない、だったらこの人と一緒に何にできるかな、そこで柔軟に対応出来るかがとても大切だと思うんです。図らずも対応する力というのはアダプティブに対応する、すごくそういう適合するみたいな、非常につながるような概念かなと思いました。

3 つ目はですね、私を開く力と言いたいと思います。これは「わたくし」という言葉は、ある人に言わせると稲は自分のもんだと抱え込んだことから来たらしいです。逆に「おおやけ」というのは開くということ。色々、お話しあつたように未来は色々な形でこう自分のためだけではなく色々な可能性を持っている。例えば「農」のことだつて自分が食べるもののためだけけど、地域の中でのある循環のためになっている。これ必ずしも公なので行政がやる話しではないですね。そういう色々な公共的な活動みたいなものがここからつながっていくといいのかなと思いました。

司会の不手際もあって時間も限られているので、十分に議論を深めることができませんでしたが、エコシティの活動自体はこれで終わりではありませんので、これから多分長期プロジェクトに展開していくことですので、是非継続的にこういうものを積み重ねていく中で、うまく「エコ・コミュニティ」にたどり着けるように推進が進められると思います。それでは短い時間ではありましたが、今回参加していただきましたパネラーの方に拍手をして頂いて、これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

3 本日のまとめ「エコシティたかつ」推進会議 岸委員長

みなさん、おつかれさまでした。エコシティたかつの切替の時期かなという気がいたします。なんとなく面白いことが始まるぞという事で動きだして、ここで一息入れて、次に進むにあたっては、妙な言い方をすると、ここがポイントっていう所を一人ひとりが見つかんで、推進の中心をつかんで、よし自分はここでがんばろうというところ、学校ビオトープ、流域と場所をはっきり意識したような動きになっていくタイミングだと私は思っています。私の役目はたぶんちょっと大きいこととお話しすることかなと思うので、最近の世の中の動きも含めて、エコシティたかつのこれから、どんな状況でどんな環境でやっていくのかお話しさせていただきます。



まずは生物多様性の保全・回復は本当に重要な話なんですけど、みなさんなんかそんな話しどっか行っちゃてるような気がしていませんか。新聞でもあんまり話題にならない、今どうしてるんでしょうね、生物多様性の話しは。実は名古屋で COP10 というのがありました。あの時まではあっちでもこっちでも里山って言っていたのを覚えていませんか。今、あまり言わないでしょ。どうしてだか、どうなっちゃったんだかご存知ですか？里山にかんしては当時の首相が「里山イニシアティブ」に 1,620 億円を支出するという発言をして、ある種の里山運動が収束しちゃった。だからそういう活動でお金を回して色んな活動する人達が、経常費が回るようになってしまったので、もう宣伝広告的な活動を大々的にやる必要がなくなった。じゃあ生物多様性そのものは？っていうと、生物多様性の危機というのはある意味何も解決されていません。で、2010 年の名古屋での COP10 という集まりの時に、生物多様性どうしたらいいかわからない、里山だけが結局お金が出たけど後どうしましょっていうんで、僕は会合には行ってないのだけど、そこでいろいろ提案する人達と友達なので。ちょっと大げさに言えば方向の見えないことになっているんですね。で、何が今、突出しているかと言うと、実はどっかでお聞きになったかもしれませんが、生物多様性の主流化。主流化って不思議な言葉が今、メインテーマになっているんですよ。英語でメインストリーム化って言います。メインストリーム・バイオ・ダイバーシティ。色々やってきたけど生物多様性ってよくわからない、いまだにわからない、焦点がわからない。もっと言うと何もかも他人ごと。里山ボランティアで絶滅危惧種を守ってる、でもなんかよそごと、自分ごとにならない。っていうんで、実は CEPA ジャパンという組織の代表をしている方が日本提案っていうことで「生物多様性の 10 年」って提案して、それが日本国提案で

国際会議を通っちゃって、2010年、11年、12年、もう3年。あと7年で生物多様性の10年、成果がどうかって検証しなければいけないんです。でもなんかスカスカしている。僕はその方ともよくお話しをするのですが、とにかく生物多様性に関して学者的、抽象的な議論が先行して、よくわからないけど里山が走り回って、みんなわけがわからないままここへきてしまって、もう一回足元から見直しだと言うんです。主流化って、大変いいこと。具体的に申します。例えば、温暖化緩和策というのは各自がかなりしてるんですよ。テレビあんまり付けてちゃいけないな、リサイクルしなきゃ、資源の節約しなきゃ、電気あんまり使わないようにしなきゃ、かなり徹底してますでしょ。あれ、自分からなんですよ。だから温暖化緩和策貢献というのは本当に日本の国民はしっかりしていて、お家で一生懸命やっている。それが直接効いたのか今年のクリスマス、私の自宅のある町田の山の中は、お屋敷全部ピンピンに光り輝かせるイルミネーションが本当に嘘のように静かになったんですね。3.11もあったんですが。同じように生物多様性貢献というのは主流化してるでしょうか？してないですよ。もう一つ例を出すと、ゴミの減量というのはかなりしっかり主流化してるんですね。ゴミの減量する時に、家はゴミだらけ、分別なんか何にもしない、街もゴミだらけ、でもみんなでアフリカのゴミ拾いに行こうかって誰も考えないでしょ？自分からしてるからなんですよ。生物多様性に関しては、何をやったら生物多様性に貢献かわからないまま、今まで来てしまっている。単純な話し、生物多様性というのはさっきも出てましたが、種の多様性、遺伝の多様性、生態系の多様性。学者や官僚のみなさんが使うための定義で、私は生物多様性の専門家ですが、あんな定義いらないんですよ。じゃあなにがいののか、地球は生き物の庭にうち満ちた星であるということ。我々はその生き物の庭の中で生きているんだから、毎日家の周りで生き物を応援することをやればいい。自分の周りからゴミ拾いを始めるとまったく同じです。学校流域プロジェクトはそれやってるんです。さっき子どもたちが本当に感動的な話しをしてくれて、水のビオトープだけではなくチョウチョのビオトープを考えたらミカンの木があった。ミカンの木を大事にするっていうのが、その学校の校庭において、生物多様性の保全が子どもたちによって自分化されたんです。あれを、ホッキョクグマどうしようか、熱帯雨林をどうしようかって、そのうちは抽象的、観念的。生物多様性の主流化これからです。条約が提案されたのは1992年ですが、20年たってスカスカで来た。エコシティたかつの100年先を考える、100年先の高津の生き物の賑わい、校庭はどうなっているだろう、企業の敷地はどうなっているだろう、街の街路はどうなっているだろう。ちょっと想像してみてください。学校はミカンの木が大切にされて大きな木になってミカンもなるし、チョウチョもいっぱい来るし、水のビオトープには賑やかにトンボがやってくるし、子どもたちもそれを1年生から6年生までみんな応援して、地域の人も応援して、そういうふうになればいい。そういう道筋がようやく始まる。

学校流域プロジェクトが本格的に次のステップへ行くってことなんです。同じことが実は温暖化適応策についても言えるんです。温暖化適応策ってどういうことか。全然、日本では理解されないままここまで来ちゃったんです。これ先進国でよく言うんです。先進国では日本国だけの不思議な現象です。国家官僚のみなさんも学者たちも温暖化適応策にみんな関心なかった。緩和策ばかりなんです。例えば、今年の7月にイギリスは温暖化適応策のイギリス国家としての業務計画を前倒しして発表した。色んな文書が出て、既に企業などに対して、適応計画を出せと言っている。日本国はまったくなんにもできていない。今、ようやく政府が、環境庁が中心になって2年後に基本指針が出せるかな。え、なんでこんなになっているかというと、日本のエネルギー政策、日本国は資源が無いから、石油、

天然ガスがひっ迫した時に生きていけないから。原発で生きていこうと決めていたんですよ、とうの昔から。原発で生きていく、他に手が無いというためには、炭酸ガスを出したら大変だと宣伝しかなかった。良くも悪くもそういう宣伝しかなかった。だから前の前の首相かな 2020 年までに 25%削減と言いました。それは原発が 14 基増設することが決まっていた。今の政府は 2020 年までに 2005 年基準で 3.8%削減という約束をしているんです。25%が 3.8%に落ちている。しかも基準が 2005 年で元は 1990 年基準ですよ。1990 年基準にすると今の日本国は国際的に約束している 3.8%は+3%。何って言うかもしれないけど、国家がそれを約束している。日本だけなんですよ。他の国、最大の炭酸ガスを出している中国、アメリカはなんにも約束をしていないんですから。みんな日本が悪い悪いって言うんだけど、とんでもない。日本が一番しっかりしているんですよ、3.8%。あまりに正直だからそれしかできませんって。日本は今頑張るとんでもない削減をやっている。日本はもう 4%を遥かに下がるくらいしか炭酸ガスを放出していませんから。地球の温暖化は止まらないです。だから日本は持てる資源を炭酸ガスを放出しないでいい技術革新をもうすでに充分やっている。それを発展途上国にもどんどん安く譲ってあげる。その方がはるかに貢献度が高い。かつて経団連がそうしたらよいと言った。当時私も同じ意見だった。東京都の Cap & Trade の委員会であんまり意味がありませんと発言して委員をクビになった経緯がありますけれどもね。ようやくみんなわかってきた所です。で、適応策です。実は日本の適応策はガタガタ、なんにもやっていない。適応策って何ですか？治水をすること、防災対策、土砂災害対策、渇水の時に水を溜めること、ヒートアイランド現象でおじいちゃんおばあちゃんが死んでしまうのをどうやって抑えるかということ、みんな適応策である。温暖化で豪雨が今までよりも強く、干ばつの可能性が強く、ヒートアイランドが厳しくなる。今までよりも治水対応、渇水対応、土砂災害対応、温暖化ヒートアイランド対応を強化すれば適応策。本当にそれだけのことですね。今までの年度目標の 30 年目標を 20 年にすれば適応策。今までの 50 年に一度の雨を 30 年でかわせるようにするというのを、50 年に一度の雨じゃなくて、今現在 100 年に一度の雨に対応すれば良い。100 年に一度の雨はいずれ 50 年に 1 度降る雨なのです。何の難しいこともないけど、難しい、難しいって国を始めとして動かずにきてしまったんですね。だから何をやればいいのか、温暖化適応策についても主流化をしましょう、自分ごと化しましょう。家の周りに雨が降ると土砂が落ちてくるので、それを止めましょう。集中豪雨で家の周りがちょっと浸水するので、それを止めましょう。全部そこから始まるんですね。で、来年 3 月 25 日～29 日にかけてお隣の横浜市が IPCC の第 5 次報告のワーキング 2 という国際会議を招集して、たぶん来年の 3 月末から適応策、適応策、適応策と嫌でも大騒ぎになります。もう原発大增設して、緩和策で何か政治的なすることは不可能。代替エネルギーをとにかく全力で開発して、同時に適応策をやっていくということしか、日本国が世界に誇れることはない。たぶんその時に高津区ってもうそんなのやってるよ、なんで高津区そんな先に行けるの？っていう時が来ると思う。その時に浮き上がらずに、学校のビオトープを流域プロジェクトにしていく。足元の小さなことで緑を大切にしてお水災害、土砂災害を止めることができ、そこにつっこみ、浮き上がらず、それが主流化。みんながゴミを拾えるようになったら世界中のゴミを拾って捨てるようになる。みんなが家で色んな物を節約するようになったら世界中でするようになる。全く同じことを生物多様性でも適応策でもやる。それをやっている自治体が無いんです。本当に無いんです。日本国でここだけです。川崎市高津区だけがそれを看板にしています。是非、浮き上がらないで頑張ってください。そういうことで、ちょっと先にいっちゃったけれど、先にいっちゃったものの責任として一番重要なのは、宙に浮くことでは

なくて足元につたを組み込むこと。今日はそんなことが確認できれば。少人数のみなさんですけれども、高津の100年計画らしい推進会議なのかと思う。ちょっと長くなって申し訳ありませんでした。ありがとうございました。

以 上